春の柏陽スポーツ界

陸上

陸上陣春の活躍を顧みる

山田、塚原を東京に送つた柏陽陸上競技界は、伝統の名聲を保持せんと若手新人の眞摯な冬期練習の結果春の蓋開きには依然県内一方の雄たる實力を示した。

四月十三日恒例のロードレースを經て、四月二十九日県下駅伝競走にはロードレースの最上位三人を溫存欠場させながら、柏工を中心とする新人のみで固めたチームで健闘よく七位となつた。この驛伝が春たけなわの遲い時期に行われることはトラック競技を志す者に技術的な支障を及ぼすので、当地競技者は第二義的に考えて來た。このことは決して誤りでなく、寧ろこの駅伝の期日を變更させる必要がある。

溫存した力は五月五日まで蓄えられ、県下リレーカーニバルには雨中の加茂グランドで一〇〇〇米メドレーリレー、哩リレーに五十嵐杯、大杉杯の大杯を連続二年獲得して気を吐いた。単獨種目に於いても遠山、柴野、飯塚、小林、坂井、村山が健闘して優勝又は上位入賞を得た。五月十一日高田に於いて行われた上越高校陸上大會には柏崎勢で蹂躙し、中でも飯塚(高)はハンマー投で四六米八二の縣高校新記錄を作り全國大會への希望を深め、ポス・スプリントとハードルに優勝した小熊ポス・ミドルデスタンスに制勝した村山(共に工)ポス・スローの覇者となつた田中(常盤)以下新人連の活躍は柏崎デーの観を呈した。

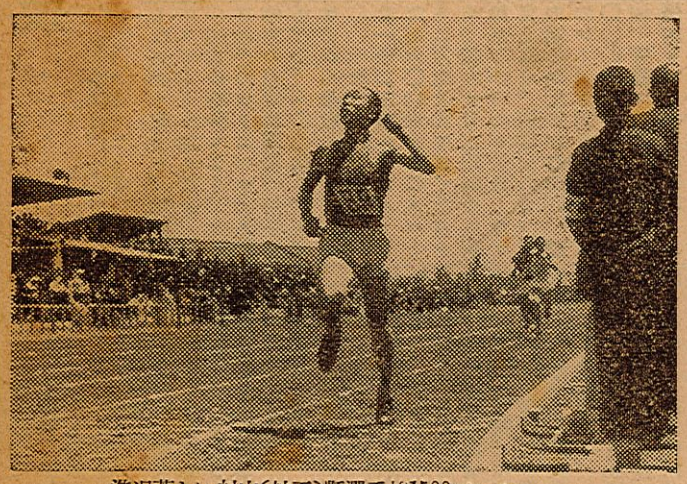
十八日には高田で上越選手權が開催され、遠山は一一〇障碍で一五秒三で走り漸くハードルをマスターした進況を見せ、八〇〇米も二分五秒で輕く走つて今後四〇〇中障碍に期待を抱かせる走姿であつた。

次に注目すべきは村山(工)が一五〇〇米で四分二四秒八を擧げ、塚原以上の將來性を示したことと飯塚が砲丸投に進歩を見せて十二米をオーバーしたことである田中雍子は相不變常勝を誇り砲丸で九米三一を出した柏農を出た阿部は棒に三米二〇を跳び精進振りを発揮し、小熊(工)のしぶとさも成長しているところを見せた。

以上の前哨戰を終り、本格的シーズンに入つた五月二十四、五日、今年始めての地元大會、新潟県選手權大會に遠山(八〇〇米)村山(一五〇〇米)村山保(三〇〇〇米障碍)新保(一一〇高障碍)佐藤(砲丸投)飯塚兄(ハンマー投)田中(円盤砲丸投)高橋(槍投)の九個の選手權を獲得した。柴野は四〇〇米で胸一つの差で二位となつたが輕快さを増して來たので整調後の今後を樂しませ、江口(常盤)も好調でよく保田を追うていたので縣高校大會には有力な優勝候補と目せられるに至つた。新大に進んだ春川は走高跳で一米三五を越え好調に見えたが脚を痛めて走巾跳は箱田に挑戰出來なかつたのは惜しかつた。飯塚は円盤で村田(松高)に破れたが縣下高校大會で再會する兩者の優劣はこれを以てしてはつけ難い。小熊(工)の短距離は確かに強くなり二百米ではよく強剛を破つて三位となつた。

特記すべきは第一日雨中の三〇〇〇米障碍に敎え子と競り合つた老雄西澤の奮闘である。競技を愛する權化西澤には敬意を表さずには居られない。塚原、金子他強力選手を卒業させた柏工が、その堅陣を誇つた長距離に搖ぎを見せるかに思われていたが、西澤と共に柏工の指導陣に入つた曾つての名選手星野伊太郎(一萬米三二分十一秒、村社選手を昭和十一年の関東インターカレッヂで破つている)の薫陶を受け秋までには持ち直すきざしを見せて來たことは喜ばしい。スポーツは就中陸上競技は面白さや興味につられて進歩するものではなく、苦しみに堪える者こそが勝利を得る嚴粛さを魂に刻む必要があろう

遠山は推薦を受けてオリムピック最終豫選出場のため横浜へ旅立つた。重厚な陣を敷き松高と覇を競わんとする柏高、新潟中央、西



進況著しい村山(柏工)縣選手權1500ゴール

籠球

再び新大高田ク優勝

北陸バスケット

芝高と共にビッグスリーの域に達した常盤、地元の利をいかしさんとする柏商、柏工、柏農が今、六月七、八日の縣下高校選手權を手ぐすねひいて待つている。その活躍に注目しよう。(今井)

本団主催の第三回北陸籠球選手權大會は四月二十六日二十七日の兩日、柏高、柏工高、二中の各体育館に開催された。

第一日の二十六日は高校男子の部十四チームの準々決勝まで擧行の豫定を長野三チームはじめ棄權不参チームが六チームのため變更して決勝まで擧行し、高田高校が優勝した。

第二日二十七日は一般男子、女子の二部を行つたが一般男子は高田ク、長岡ク等强豪が棄權していさゝか精彩を欠いた。女子は参加八チームのうち新潟クラブが斷然他を壓し、堂々の貫祿を示した。

地元勢は、高校男子四、一般男子二、女子二チームが夫々参加したが、高校の部では柏高、柏農高が相手チームの棄權によつて三位にまで進んだが、決して順當な成績とはいえない。柏商が高商と延長戰を交えてこれを破り、緒戰に活気を与えたからだろうが、高田高に敗れたとはいえ地元高校で最も印象の深い活躍をした。他の三校(高、工、農)はいづれも一試合で姿を消し淋しかつたが、シーズン始めの事とてこれが今年のすべてを決することにはならない。

一般男子では一中OB、柏球會が参加、よく敢斗したが及ばず、再度新大高田クラブに名を成さしめた。

常盤高クラブは優勝を誓つて爽壯と登場したが、緒戰、延長三回の後、高田北城高に敗れてしまつたことは惜しかつた。

戰績

高校男子

◇一回戰

柏崎工　不戰勝　西越高B
長岡商　不戰勝　須坂農
柏崎高　不戰勝　西越高A
高田高40 — 31 長岡高
柏崎商18 — 16 高田商

柏崎農　不戰勝　糸魚川高

◇二回戰

柏崎高　不戰勝　長野農
柏崎農　不戰勝　長野北高
長岡商27 — 14 柏崎工
高田高58 — 31 柏崎商

◇準決勝

長岡商50 (16-14, 34-30) 柏崎高
高田高32 (17-1, 15-8) 9 柏崎農

◇決勝

高田高45 (24-13, 21-19) 32 長岡商

一般男子

◇一回戰

一中OB　不戰勝　長岡倶
柏球會　不戰勝　青海倶

◇二回戰

新大倶75 (35-11, 40-7) 18 一中OB
柏球會　不戰勝　高田倶

◇決勝

新大倶52 (25-10, 27-11) 21 柏球會

女子の部

◇一回戰

北城高43 — 41 常盤高倶
常盤高33 — 10 糸魚川高
新潟中央39 — 32 長岡倶

柏高傳統を守る

市内高校籠球リーグ戰

五月十二日から六日間に亘つて第三回會長杯爭奪市内高校籠球リーグ戰が柏崎高等學校コートにて行われた。

戰績

柏　高35 (17-13, 18-3) 15 柏農高
柏　高61 (37-8, 24-12) 20 柏工高
柏商高46 (31-16, 15-8) 24 柏農高
柏工高41 (16-12, 23-6) 18 柏農高
柏工高40 (20-10, 20-15) 25 柏商高
柏　高27 (15-10, 12-8) 18 柏商高

一位　柏　高　三勝
二位　柏工高　二勝一敗
三位　柏商高　一勝二敗
四位　柏農高　三敗

本年初のリーグ戰であり四月十三日の郡市選手權大會の顔合せや成績から推して、柏高、柏工高、柏商高の三校には優劣をつけ難く興味深々たるものであつた

即ち柏高は郡市選手權で柏商高に敗れてはいるが、豐富な選手を備えており、その技術も最近メキ〳〵と上達しているので、残された伝統にそむかぬ成績を示すことであろうし、工高又柏高と同じくコートに惠まれ選手も八九人揃つているので期待がもてるし、柏商は昨年あたりからぐんと進出してあなどり難いところを見せている、そして商業と工業は今年になつて一度も顔が合つていないから、どつちが强いかと聞かれても一寸首をかしげざるを得ない、强いて順位をつけるなら柏高が先づ優勝して、商業が之につぎ、第三位は工高で、農高は第四位に甘んじなければならないだろうというところであつた。

ところがリーグ戰の結果は工高が商高に勝つて二位になつた。毎日一試合づつ六日間に亘つたため、第二試合柏高との試合に臨んだ柏工高は折柄修学旅行中で主力が拔けレギュラーは一人だつた。あとで柏商を破つた実力から推して正メンバーで戰つたら或は勝をものにしたかも知れない。

併し乍ら柏高はいづれのゲームに於ても第二メンバーを出す余裕を見せ殊にその第二メンバーが長身揃いで將來に期待がもてて頼母しい限りだ。農業高校はコーチに望まれていない。基礎技術の研究が足らない。悪い癖がついたら大變だ。この気持がゲームを見ていて感じられた。このリーグ戰の中で、一番いゝゲームは初顔合せの柏工対柏商の試合だつた。激しい得點爭いに第一クオーターは13対11で工高がリードして終り第二クオーターからそろ〳〵工高が元気にまかせてリードし、商業は旅行で疲れたとはいえ、日頃の実力も出なかつのか、ファウルが多く、後半五分でC沢がオミットになつた。第三クオーターの終る頃から趨勢は決したように感じられた。結局は十五點の差で工高が勝つたが、商業の敗因は、調子如何は別としてファウルが多かつた事と、ボールを粗末に扱い過ぎた事だろう。(柳)

スポーツ今昔物語(七)

新潟高田両師範の葛藤

大杉、芹澤、有坂今やなし

恐らく教育界に、新潟・高田兩師範程犬猿もただならぬ學校はなかつたものだ

それが全縣下の教育界に學閥問題として物凄い葛藤をやる。それに関係のない我々にすれば迷惑至極、實に見苦しい限りであつた。その學閥問題が競技に現われ競技が更に學閥問題に油をそそぐと云う次第で、いやはや見苦しいことであつた

新潟師範には、有名の大杉喜秀先生が來て、陸上競技に全力を傾け、全國大會に幾年か覇權を握つていたことはあまりにも有名であつた。隨つて、高田師範は全く歯が立たず。さなきだに、教育界をろうだんし実權を握つて高師を尻の下にしようとする新師に、一層の優逸感を燃え上らせるばかりであつた。

これに反し、高師閥は切歯扼腕唯墳怒のまなじりを逆立させる外はなかつた。そこへ有坂氏が、新師打倒を最高目標として、体育教師に乗り込んだのだつた。

有坂氏は、実に指導はうまかつた。彼の指導は非常に合理的で、あのがむしやらな、唯猛猛烈にシボル主義の大杉氏の指導とよい對照であつた。そして彼は遂に、宿敵の常勝新師を破つて高田閥に凱歌を擧げさせた功労者であるが、茲に一大失策?とも云うべき問題が起つた。それは選手獲得問題である。確かグラウンドの出來た翌年の大正十三年の春ではなかつたらうか柏崎中學校から、武田剛、佐藤栄吉等々の强豪が、そろりと卒業するので、兩師範が手を伸ばさずに居る筈はなかつた訳だ。しかし、刈羽柏崎は地理的関係から当然高師の地盤で、教育界は高師閥で堅められてありかしその甲斐もなく、武田柏中卒樂で教員志望者は全部高師の二部へ入つたことは言うまでもなかつた。茲に茲年卒業の中に、全國優勝のハードラー武田剛君が教員志望の二部進學で、これは当然高師入として、坂氏と武田君との間にもすつかり渡りがついて、有坂氏すつかり悦に入つて居たとか。一方、老獪大杉のこだ。ドッコイそうはいく置かれぬぞと、そこはさすがに新師閥の機能と政治力を発揮、あの手、この手で誘惑?したのであろう、遂に武田剛君、高田に背を反けて、こつそり、形ばかり?の受驗に新師へ走つてしまつたものだ。これを知つた有坂君の狼狽は察するに余りある樣だ。それつとばかりに、密使に新潟に馳せて、受驗中の武田君を呼び出し、談判か、哀願か、誘惑か、そこまでは筆者が行つたのではないから保證の限りではないが、兎に角やつきとなつて連れ戻しに行つたことは事実らしい。しかしその甲斐もなく、武田剛新師入學の發表となり、又しても高田閥の敗戰となつてしまつた。有坂君、泣いて〳〵泣き崩れたと聞いたが、さもあるべきことで筆者等も、有坂君の心事を思うて同性の涙を流したものだ。

この武田君問題は、さなきだに熾烈な兩師學閥の葛藤を弥が上にも燃え上らせこれを赤裸々に明るみへ、さらげ出してしまつたのである。気の毒なのは有坂氏で、その責任を負つて遂に高田を去つて靜岡へ。その後、苦しい心境を慰むる爲めも手つだつてか、酒量はいよ〳〵進み、これが健康に及ぼして、その後幾年ならずして、此の世を去つてしまつた。誠に本人には気の毒であり、競技界の爲めには惜しいことをしてしまつた。

高師には、有坂氏の代りに、東京高師出身の稀に見る秀才だと云はれてゐた芹澤氏が赴任して來た。此の先生は身体が極めて虚弱であつて身を以つて實技の指導こそしなかつたが、その指導計劃は実に學理的であり合理的であつた。而して赴任して二年目には、柏崎の競技場で開かれた県大會に、新師を抑いて凱歌を擧げた。その時芹澤氏は、フキルドで筆者の側にあり、平靜そのもので、よその競技でも見るよゝな態度で、「今度のレース斯くかくなりますよ」と一々豫想を述べられたものだが、それが全くよく的中したもので、筆者はその明晰なる判斷と頭のよさに吃驚したものだその芹澤氏も、その後東京へ歸られ、間もなく他界されてしまつたものだ。

更に、新師の至寶であり新潟競技界の偉勳者大杉氏も、新師から新潟鐵工に移り、是れ又酒豪が祟つて長逝されてしまつた。

庭球

縣下春季地区大會

兼マ杯柏崎地區豫選大會

期日　五月三日午前九時
會場　柏高コート四面
参加チーム　一般男子　十九チーム
少年　二六チーム
女子　三チーム

成績

◇一般男子

準決勝

(佐藤(高) 4—1 石黒(柏)) 清野
(柴野(日) 4—3 川合(柏)) 大矢
(加藤(陽) 4—2 坂井(研)) 飯塚
(入沢(柏) 4—3 佐藤(理)) 決勝

(佐藤(高) 4—1 石黒(柏)) 清野
(臼井(柏) 4—2 丸山(高)) 長久保
(佐藤(高) 4—1 加藤(陽)) 佐柴
(臼井(柏) 4—3 佐藤(日)) 決勝

◇少年(高校男子)

準決勝

(丸山(高) 4—3 大川(柏)) 星野
(長久保(柏) 4—3 佐柴(日)) 決勝

◇女子(高校)

(安藤(高) 4—1 加藤(柏)) 平野
(布施(柏) 4—1 加藤(柏)) 決勝

評

一般男子

今シーズン初の大會であるため全部が殆んど練習していないので一般的に凡ミスが多く、コートの惡條件も手伝つて合理的な好プレーはみられなかつたが、初戰より参加チームが夫々全力を盡した立派な白熱戰が展開されたことには敬意を表する。大會を通じてみて今シーズンの覇權は柏陽のシーズンに入つて日も浅いので一般にプレーは未熟で强引さがあり脆さが見られる。今後一層科學的にして合理的な研究を切望したい。優勝した臼井佐藤組でも荒けづりで、未熟さがある。更に精進を重ね試合度胸をつけて県下を制覇して貰いたい。決勝で敵闘した新人の丸山長久保組はほゝえましく期待出來る素質を前後衛共十二分に持つている好コンビである。一層勉强してもらいたいものである。準決勝で惜敗した柏高の大川星野組も當日は不調であつたが期待する好チームである。合理的なプレーを忘れてはのびない他の柏工、柏農チームには基礎練習の精進を切望する。柏商が折からコーチ來校の爲不参加だつたのは淋しかつた女子球歴が浅いのでやむを得ないところだが、カンと動きや基礎練習が大切であるもつと勉强して下さい。(文責　加藤)

陸上競技

オリムピック選手決る

十六年振りにオリムピックへ参加する陸上競技代表を決定する最終豫選会は五月三十一日、六月一日の兩日横浜市三沢競技場で開かれた。

三澤競技場は昨夏山を削り溪を埋めての難工事を三ケ月の突貫工事で完成したもので細部の點の粗雜さは多少あるとしても、まず近代的モデル競技場と言つてよく、失對事業は相當期間を失業者に就労の機を与うるべきだとの一部非難をも押しきつて強行されたものでいざとなると思いきつたことをやつてのける横濱の風格を示したのである。

大会の二日間とも曇天で且前日までの雨でアンツカー走路も重く最良のコンデションとは言い難かつた。

本縣よりは遠山、味方が参加した。

期待を集めた三段跳は飯室が五回目に漸く十五米一九に達しただけで長谷川は十五米に達せず三位に落ちたのにはガッカリさせられ棒高澤田も四米五に止り、巾の田島又平凡、走高に至つては一米九〇が越えられず日本の特技跳躍は不振で期待を裏切つた。投擲では砲丸の辻、ハンマーの吉武等奮闘したがその記録を國際水準に比すれば悲觀せざるを得ない。男子短距離にも細田の強さが一人光つたが記録は悪かつた。女子では吉野圓盤で春以來の好調を初めて記録に示し、オリムピック入賞圏内の力を見せた他吉川が一〇〇米と巾跳に勝ち断然たる強味を発揮したが巾跳の五米六八はオリムピックに望を抱かせるものである。

全般的にはこの大会がファンの期待に答える程緊迫した高程度のものでなかつたが、僅かに三〇〇〇米障碍、八〇〇米、五〇〇〇米、四〇〇米、四〇〇米障碍と女子八〇米障碍はオリムピック行きの金的を射とめんものと決死の気魄がうかがえて凄壮な空氣を醸し觀る者をして手に汗を握らした。その第一は高橋の三〇〇〇障碍で、昨夏私が注意した欠點も改まり、障碍毎にスピードを加え行き、その速力の配分もよく、九分五秒台のオリムピック入賞圏内の力走は満場の拍手を浴びた。八〇〇米の室矢は始めから果敢にリードし四〇〇米を五五秒、六〇〇米を一分二三秒八でカバーしたが五〇〇米からのスパートに力を入れすぎてラストまで續かず日本記録は更新出來なかつたが快走したと言えよう。記録をねらつての乗るか反るかの決死一番のレースと言うところ。五〇〇〇米は井上、石井、山田、守屋、田茂井と強豪が優勝をねらい互に牽制しあつて前半やや遅きにすぎたが後半特に最後一〇〇米を激走し四人とも十四分台を出した力は十四分三〇秒台實現も遠くはないと思わせる。井上、山田のラストスパートは印象的で最後の四〇〇米を六二秒で行つた。

春以來好記録を作つていた松井を破つた的場、山本、松野の四〇〇米も熱戰と言つてよく、これらの混成チームで走つた哩リレーでは岡野四八秒八、室矢四九秒三、山本四九秒五的場四九秒五のラップであつた。岡野が復調して快走した四〇〇米障碍の日本タイ記録も立派であつた。

女子八〇米障碍で今春突如出現した福島女高二年の尾形が豫選で宮下、米陀らを一蹴し、素晴らしいスピードとハードリングを見せて一一秒八で勝ち満場を呆然とさせた。決勝では宮下が復調して快走した四〇〇米障碍の日本タイ記録論に決つた。又ハンマー吉武を投擲に勉強さすために武を投擲に勉強さすために言う希望と一〇〇障碍の本南、河田中一人を加えよとの希望により女子の尾形と入れ替えよとまで論議されたが、尾形の水準が高いと言う織田コーチの意見が通つたのである。

いつもものめて徹夜会議となる選衡も今回は夜半十一時四〇分に終了した。無難妥當な人選と言うべきであろう。

十六代表が決定發表された後身体検査の結果尾形が心臓肥大であることが水町醫員診斷の結果明らかにされ代表より削除されたことは気の毒であつたが、大切なオリムピックであつてもそのために一人も犠牲にすることは出來ないと決断を下した水町ドクター及び監督の處置は適切であつた。

（四日今井哲夫）

天狗リレー（十二）

一人で二十九點

北信越五縣大會に優勝

今井哲夫

先日の県下高校陸上競技大會に佐渡高の本間が五種目に優勝、一種目に二位、三十五點の未曾有の個人得點を擧げて驚嘆の的となつたが、私は柏崎中學五年生の昭和四年六月、高岡市に於ける北信越五県中等學校競技大會で四〇〇米、八〇〇米、一一〇米高障碍、棒高跳に優勝、一〇〇米に二位で二十九點を得點し、高田師範、富山師範、石川師範を破つて柏中が優勝する主因を作つた。佐高本間の得點より一種目の優勝だけ少いが、内容中距離を含むだけ困難でその萬能振りに於いて本間に劣るものでない。その記録は一〇〇米一一秒六、四〇〇米五五秒四八〇〇米二分一二秒、高障碍一六秒八、棒高跳三米三〇Aであつたから相當なものであつた。当時の師範は今の大學であり、當時の中学五年は今の高校二年生に當るので全体優勝も又そのレコードも現存の水準に劣らない。

この様な蹶起したのはその前年外山三郎氏（現柏崎陸協會長）が五年で主將をし、私が四年生であつた時この大會で最後の一六〇〇米継走を棄権して石川師範に名を成さしめた無念さの爲であつた。その時も外山氏と私が中心で各々五種目位のかけ持ちで各々二〇點位の得點をしその各選手とも多種目に奮闘して総得點に於いて石川師範と夕闇迫る頃最後の哩継走で決戦することとなつたのである。ところが各選手とも疲労困憊し控所のテントの中で寢たまま起き上ることも出來ない。私は酸素吸入をしていたがラスト・コールを聞くや狂気の様に飛び出してスタート位置に向つたのである。ところがチーム・メート遂に起たず、私は無念さに溢れる涙で石川師範の雀躍を見た。

昭和五年の大會では金子、桑山、武藤、山崎、坂田等の奮闘も加えて継走には私を除いてのチームで樂勝して凱歌を擧げたのである。この大會の時は丁度臨時試驗の最中であつたので土曜日の午後高岡に向けて出發し、車中でも、宿舎でも選手は教科書とノートと首つびきであつた。

優勝を確信していて破れた高田師範は全員が剃髪し歸校後は部旗を焼いて口惜しがつたそうである。

私には素質天分があつた訳ではない。柏中に入學した頃はかすんでいた。一角の者になるには、と人の二倍三倍の練習をし、体を冷さぬ様、と眞夏でも多物のズボンシャツを着用した。練習が私の全生活であつた私は走力の向上に全力を盡していたので脚部の發達は寧ろ異狀とも言うべき程であつたが、脚部に比し上体が貧弱であつた。斯くてはラスト・スパートに威力を發揮することは出來ないので四年生の冬は專ら倒立、鐵棒等で上体の訓練に傾倒した。その結果一冬にして胸囲は二尺八寸から三尺を超えた。

二年生の時柏中の一〇〇米選手となつて彌彦の県下中等學校大會に出場した。時に一二秒三であつたから今の中学生より強かつた訳だ。三年生で四〇〇米五七秒、四年生の時には五四秒と五年生の春三條グランドの県選手權で出した五三秒四はその年の全國中學ランキングの二位であつた。この三条の四〇〇米は新潟師範の岩脇（現榮木氏）との決戦であつた。負け嫌いの新師大杉コーチが新師勢で県下の優位を独專せんものと、短距離の第一人者岩脇（一一〇〇米一一秒二、二〇〇米二二秒八）を起用して私を屈服せしめ様としたが、私は之を退けた。

幾多勝利の中で忘れ得ぬものの一つに私が四年生の時の長岡高工の招待県下哩継走がある。雨で他の種目は一切中止となつて唯招待継走のみが行われた。強敵は新潟師範で岩脇、安達、山内、田村と揃えた実力は全国中等界でも絶体不敗のものであつた。柏中は外山尾崎、松田、私はアンカーを承つた。この結果はスタートの猛烈な競り合いに外山氏が競り勝つたと見るや焦つた岩脇のバトンは外山氏の肘ではね飛ばされて遅れ、柏中はその二〇米の差を最後まで保つて勝つた。岩脇君はこの時のことは一生忘れ得ない遺恨事であると今も言つている。私達の時代は、先輩の田中眞茂、佐藤栄吉、廣島英雄時代の黄金時代に次ぐ第二の黄金時代であつた。

數々の思い出を抱いて、悔いなき中学生活を卒えて私は笈を東都に負うべく志を立て、陸上競技界の先人織田幹雄選手及び先輩佐藤栄吉選手を慕うて早稲田大學入學を志望したのである。

（次號に續く）

柏高、常盤共に二位

縣下高校陸上競技會終る

秩父宮賜杯第五回全國高校陸上競技選手權大會新潟県高校対校選手權大會は六月七、八日、柏崎市営陸上競技場に男子四一校、五〇四人（延一三二八人）、女子二一校、一四二人（延四一六人）の選手が参加する未曾有の盛大な大會となり幾多感銘深き場面を展開し成功裡に終つた。

前夜珍しい豪雨で細心な注意で整備したコンデションも、それこそ水泡に歸すかと憂慮されたが明ければ初夏の陽光輝く快晴となりグラウンドも七日午後に至り完全に乾いて絶好の狀態となつて選手の活躍する舞台としては申し分なかつた。

大會を通じ最も印象的であつたのは佐渡高本間信弘の阿修羅の活躍であつた。佐渡豫選に於いてその片鱗を示し、本間強しの下馬評は高かつたが、これ程迄の強力は何人も豫期し得なかつたもので、その強さと共に眞摯な態度は満場の感動と尊敬を一身に集めたかの觀があつた。一〇〇米、二〇〇米、一一〇米障碍、走巾跳、三段跳に優勝し、走高跳に二位となり、一人でよく三十五點を稼いだ強剛振りもさることながら、荒削りのフォームの中にひそんだ優れた天分は、磨けば日本の第一線に進出し得べき期待を抱かせ、再建に進む陸上新潟のホープを見出したことは限りない喜びであつた。佐渡高は更に長距離の本間久喜が二種目に優勝し一一〇中障碍三位の近藤、棒高の三位の櫨本、鐵鎚二位の本間慶二他下位得點を加えて六十七點の大量を擧げ文句なしの堂々の圧勝を遂げ、無形乍ら輝く榮冠は海を越えた。

優勝を爭うと豫想された松高、柏高は佐渡高の前に光を失つた感はあつたが激たる事は不運ではない。オーバー、ゾーンするその事自体に勝つべき要素を失していたろう。然し乍らこの出來